



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

沖代

おき だい

II 沖野々

天正17年(1589年)といえは、豊臣秀吉の権勢絶頂期にあたる。したがって、その時代にこの地を支配していたのは山内以前の長宗我部氏ということになり、また、この地が本在家城の麓に位置し、領主の東氏の居があったとされる場所も隣接していること、あるいは、西氏が支配する

この小さな集落が、正式に「村」として編成されたのは、様々な文献や検地帳などによると、江戸時代初期の窪川山内家が盛んに行った、この地域一体の新田開発以降であると思われる。しかし、集落としての歴史はさらに古く、天正17年(1589年)に行われた検地結果を記録した仁井田之郷地検帳によれば、村名の元となった「ヲキノ野」の文字がすでに見られる。当時は「蔭山之村(現影山地区)」の中の一集落であったとされている。

世帯39人が暮らしている。集落は、県道19号(窪川松葉川線)沿いに位置しているのだが、注意していかないとなつという間に通過してしまいそうになるくらい、小さなエリアにまとまっている。

今回は沖代(旧沖野々村)。ここの地名表記は「七里乙」で、14

柳 瀬、本在家につづき、明治9年の7村合併により七里村となった地区を下(南)から順にご紹介しています。



オブジェとしてもかわいらしい水門

県道を挟んで集会所の反対側に、農業用水のための水門がある。本格的な形式であるのにサイズが小さめ。しかも歩道から手が届くところにあり、水門というより、オブジェのような存在感を出している。水が滔々と流れる季節にはこれを開けたり閉めたりするのであるが、それによって変わる水の流れを眺めるだけでも楽しく、いつまでも眺めていた子ども時代をつい思い出す。

代地区。県道沿いにある集会所前に、明治23年の大水害の時の到達水位が記された石碑がある。県道が改修される前は道路の反対側にあつたらしい。恒石亀次という人物が設置したとされている。それにしても、ものすごい水位で、被害の甚大さが伝わってくる。



大水害の水位が記されている

蔭山之村の一部となつていたことからすれば、もしかしたら、沖野々集落の成り立ちをさらに時代をさかのぼるのかもしれない。さて、現在の沖

町のうごき	(12月31日) 人口		前月比		出生		死亡		転入		転出	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	8,678	9,731	-11	-26	2	1	10	18	10	13	10	22
	計	18,409	-37		計	計	28	23	35			
	世帯数	8,651	-17									

(12月中の届出)

四万十川の 水質状況	適正值(mg/l)		1月9日	
	項目	標準値	測定値	状況
リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下		
硝酸	≤ 0.5	0.597		
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下		
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.050		
化学的酸素消費量	≤ 10.0	測定範囲以上		

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●
※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部